

〈XI. 展示班長のひとこと〉

※ここに書かれている内容は、展示に関する情報は一切書かれていません。展示班長の展示に対する想いが記されています。したがって、全く読む必要はありません。休憩がてら、ご一読くださるとうれしい限りです。

~~~~~

“ガリガリ”と机に向かって鉛筆を奔らせる。世の多くはこれを「学び」として重視しているのだろう。しかし、そこから得られる「学び」のほとんどは、必ずしも答えが一つに決められた単なる“情報”に過ぎない。これは果たして重視される「学び」として正しいのだろうか。

時代は常に複雑化を止めない。多様性の尊重、価値観の進化によって、生きることはそう簡単ではなくなった。毎日のようにたくさんの選択をしなければならない。そのうえ、選択肢は無限に広がっている。そんな中でも社会とは辛辣なもので、数多とある選択肢から最良のものを選び続けろと要求してくる。

現代の世界を生きていくには、机の上にある「学び」だ

けでは対応しきれない。だからこそ、動くのだ。自らの意思で。自分で考え、想像し、動く。そして養うのだ。多様な「学び」を。これこそが今を生きる僕たちが重視すべきものではないか。

このように考えると、展示は絶好の学習機会だと思う。日常では学ぶことのできない幾多のことが、展示という非日常感の中で身に着けることができるのだ。

“千種にしかできない方法”で“千種でしか学べないこと”を。

さあ、今。

62<sup>nd</sup> 展示班長

中野 王犀

# 堂々たれ、飄々たれ 人生の主人公たれ

■表紙絵

山本 皐月

令和六年 六月二十日 発行

発行者 令和六年度展示班長 中野 王犀

落丁・乱丁等がありましたら、展示班長中野までお声掛けください。お取替えいたします。



62nd 展示本